ムッツリーニを追え！！

疾風　旋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ムッツリーニを追え！！

【Ｎコード】
Ｎ９６３１Ｏ

【作者名】
疾風　旋風

【あらすじ】
文月学園新聞部がムッツリーニを調査！
その活動報告書がここにあり！！

（前書き）

短編第二弾です。
今回は題名通りムッツリーニについての小説です。
それではどうぞ。

皆さんは知っているだろうか。
ある男のことを。
ある時は華麗なるカメラマン。
ある時は静かなるスパイ。
ある時はムッツリ商会の商人。
その名もムッツリーニこと土屋康太である。
我々、文月学園新聞部は放送部と手を組んでその男を調査することにした。
その全貌を見ていただきたいと思う。
また、その中に我々が調査した情報も入れて、
この男について見ていこう。
なお、ここからは分かりやすいように土屋康太のことをムッツリーニと
呼んでいく。

＊都合により、この記事に映像、画像は１つもありません。

我々はまず、土屋家を調べて朝から張り込みをした。
すると、まだ学校に行くには早過ぎる時間にムッツリーニは出て来た。
ちなみに、今日は小さなリュックサックと大きな肩掛けカバンの前にはカメラが掛けてある。
あの大きなカバンにはカメラなどの機材や写真などの商品が入っているようだ。
すると、ムッツリーニは同じクラスである木下秀吉と出会った。

「おはよう、ムッツリーニ」

「・・・おはよう」

「ムッツリーニよ。お主は何故そんなに早いのじゃ？わしは部活があるからなのじゃが、お主は何をするのじゃ？」

「・・・仕事がある」

「お主も物好きじゃのう」

ムッツリーニは教室に着いて荷物を置いた後、仕事をするために学校中を周った。
その際に盗聴器や隠しカメラのチェックが行われた。
1年や3年の教室にも特別教室にも行った。
ムッツリーニの情報網の広さのわけが分かる。
木下秀吉によると、この時間なら人が少ないからしい。

校内周りが終わった後、ムッツリーニはクラスの窓から双眼鏡で何かを見ている。

「おはよう、ムッツリーニ」

「・・・おはよう」

学校を代表するバカ（吉井明久）がやって来た。

「何しているの？」

「・・・定期計測」

「何の？」

「・・・バストの」

「僕も見る！」

「・・・ＢＣＡＡＢＤＢＢＣＢＡＥＤＡＢＡ」

「今のってＥじゃないの？」

「・・・　今のは偽物」

「すごいね。よくわかったね」

「・・・日々の鍛錬」

我々の情報では、この他にも髪型調査やスカート丈計測などもしているらしい。

ここからは授業である。
ムッツリーニは教科書を立ててカメラの検査や写真の仕分けなどをしていた。
カメラの検査には色々な道具が使用されていて、教科書を立てるだけでは隠せていなく、ばれているが先生は何も言わない。
まあ、これもＦクラスだからできることだろう。

そして昼休みに　なった。
ムッツリーニは購買に昼食を買いに行った。
往復するのに１０分もかからないのに、６人もの人がムッツリーニ

に話しかけた。
その内容はムッツリ商会の予約や依頼である。
Fクラスなら教室で出来るが他クラスの人はこうしたタイミングしかない。
そんな中でも毎日これだけの人が来るとなると、ムッツリ商会の需要の高さがよくわかる。

そして午後の授業も終わり、一番活動が活発になる放課後になった。
まずはムッツリ商会が開かれた。
最初は3年Aクラスの常村勇作が来た。

「お前、写真を売ってるらしいじゃないか」

「・・・お前に売る写真はない」

「　何でだよ！一枚ぐらい売ってくれてもいいだろ！」

「・・・変態のお前に売る友達の写真など一枚もない。
変態に友達（木下秀吉）の写真を売るほど無粋ではない」

「少しぐらい高くても買うからさ。お願いだ！」

「・・・うるさい。雄二と交渉できたら売ってやる」

「なに！アイツの交渉術はめちゃくちゃじゃないか！」

「・・・やるのか？それとも、やらないのか？」

「アイツの写真を手に入れるためにもやってやる！」

「・・・なら、雄二。やってくれ。報酬は弾むから」
「ふっ、お前か。一気に片付けてやる！」
「くそっ、こい！」
「まずは、パンチから始まる交渉術！」
「ぐはっ！」
「次は、キックで繋ぐ交渉術！」
「ぐほっ！」
「最後は、アイアンクローで締める交渉術！」
メキメキメキッ
「ぎゃぁぁぁぁぁ！」
どさっ！
「じゃあ、こいつを廊下に捨ててくるわ」
そうして坂本雄二は屍（変態）を引きずりながら教室から出て行った。
その後に学年トップの霧島翔子と保健体育の点数でムッツリーニと競っている工藤愛子がやって来た。
「雄二の写真を買いに来た」
「・・・何枚だ？」
「5枚買う」

「・・・１０００円だ」

「何でもっと安くしないのさ、ムッツリーニ君」

「・・・こっちも商売だ」

「まぁ、ちょっとぐらいはサービスしてよね（チラッ）」

ブシュゥゥゥ！

「・・・な、何のこれしき・・・」

ムッツリーニは慣れた手付きで素早く止血、輸血を行った。
これは１つの特技と言ってもいいくらいだった。

「愛子、いたずらはダメ」

「代表がそう言うならやめといてあげるよ」

「はい、１０００円」

「・・・ま、毎度あり」

その時、

「吉井明久が姫路瑞希と一緒に帰ろうとしているぞ！」

「逃がすな！異端審問官の名にかけて！」

「くそっ！捕まってたまるか！」

すると、ムッツリーニも怪しげなＦＦＦの仮面をかぶって加わった。

「「「「「異端者には死を！！！」」」」」

そして、廊下へと駆け出して行った。
我々も追いかけることにした。
その時、

「・・・お前らもここまでだ」
カカカッ！！
そう言った瞬間ムッツリーニは何かを投げた。
すると突然、撮影していたカメラのが暗くなった。
不思議に思い、よく見るとカメラにカッターが刺さっていた。
カメラとムッツリーニとの距離は１０ｍ以上はあったはずなのに、
見事にレンズに当てられてしまった。
この衝撃と破損により映像や写真のデータがなくなってしまった。
なので我々はこれ以上の深追いは危険だと考え、追跡を断念した。

ムッツリーニに関するなぞはまだまだあると思われる。
機会があればもう一度、我々で調査したいと思う。
それではまた。

（後書き）

いい点、悪い点、感想、大歓迎です。
それではまた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9631o/

ムッツリーニを追え！！

2010年11月24日05時08分発行